アイシン高丘
人事総務部教育センター 主査
（あさの・ひろのり）
浅野 裕律さん

自動車部品を主体とする鋳造・機械加工、塑性加工、音響製品の製造・販売を手掛けるアイシン高丘（豊田市）。人事総務部教育センターの浅野裕律さん（60歳）は入社以来、鋳造ひと筋に経験を積み、技能士会会長、鋳物士国家試験の検定員なども務めた。車とバイクが趣味で、80歳まで続けられるよう、健康面も気をつけたいという。同社では定年退職後、最大65歳まで働ける制度を設けていて、現在約120人のシニア層が活躍。同社の売り上げの大きな比重を占めるのが海外で、その貴重な海外勤務もある浅野さんには、経験に裏打ちされた技能の伝承が期待されている。

若手や管理監督者へ新たな教育を提案していきたいという

製造から経営管理経て
貴重な海外勤務も経験

円熟味
毎月第2土曜日に掲載

工業高校の自動車科を卒業し、1980年に入社。西尾市にある吉良工場勤務になった。自動車部品を鋳造するラインに配属され、砂で造型された鋳型に溶かした鉄を流し込む作業を担当。1日に自動車2万台分の部品を生産するラインの大きなスケールに圧倒された。

機械が故障で停止した時に、先輩が現地で状況判断をし、素早く直すのを見て憧れ、目標にした。

鋳造技能士1級取得し、新人育成

5年目には安全作業指導員に指名され、安全活動だけではなく製品不良を減らすための改善にも力を注いだ。併せて機械設備について学び、鋳造の奥深さに触れていった。さらに5年後、30歳で班長となり、吉良工場に新しくできた鋳造ラインの監督業務に就いた。

このラインは新人メンバーが多く、いかに早く仕事を覚えてもらうかに苦労した。また、生産数の目標や不良品削減数の目標をメンバー皆で達成することがやりがいになった。

その後、係長に昇格して検査も監督し、さらに課長に昇格してからは全体的なマネジメントも行うようになった。実務作業はしなくなったが、損益、売り上げなどの数字も見るので、より細かく神経を使った。

46歳で初めての海外赴任としてタイに行った。6年ほどの間に工場長や現地法人の副社長を経験。現地スタッフを監督し、生産効率を上げるため、タイの人たちや文化を理解し、信頼関係を築くことに努めた。文化の異なる人たちと同じ目標に向かうことの難しさ、「モノづくりはヒトづくりから」を実感した。

次世代には、常に自分の目と体で学ぶことが基本だと伝えている

日本に戻ってからは本社工場の鋳造のゼネラルマネージャー、製造部部長を歴任し、副工場長となった。このころ50代半ばを過ぎていて、会社員として総決算の年代になっていた。入社時と違い、現在の鋳造はボタンを押すだけでほとんどの工程ができてしまう。手で砂を練ったり、手で機械を動かすこともなくなった。

"思い通りに造る"奥深さを後進へ

生産効率を上げるための不良数を減らす試みは、今も昔も続けられているが、なかなか効果を出せないのは、多くの社員が基本であるアナログな方法で鋳物を作った経験がないからではないか。そんな考えに至った浅野さんは周囲に、基本に立ち返って鋳造技能士の資格を取得しようと呼び掛けた。入社5年目で鋳造技能士2級を取得していた浅野さんも1級を取得し、自ら講師となって後進を育成した。

そして昨年、定年を迎えて再雇用で勤務を継続。2022年春、教育センターに赴任し、人材育成が仕事になった。新入社員に限らず、現場で働く技能系中堅社員や監督者にも、技能や知識を伝える。

鋳造の魅力は、切削加工では造り出せない形を溶けた鉄を自在に操り、思い通りに造り上げる技術にある。やり直しが可能で、すぐに造り直せる。そんな、失敗しても再チャレンジできるモノづくりの楽しさを伝えたいという。このモノづくりに携われることが浅野さんの喜びであり、技能の伝承者として「モノづくりはヒトづくりから」の信念でモノづくりを支えていく。